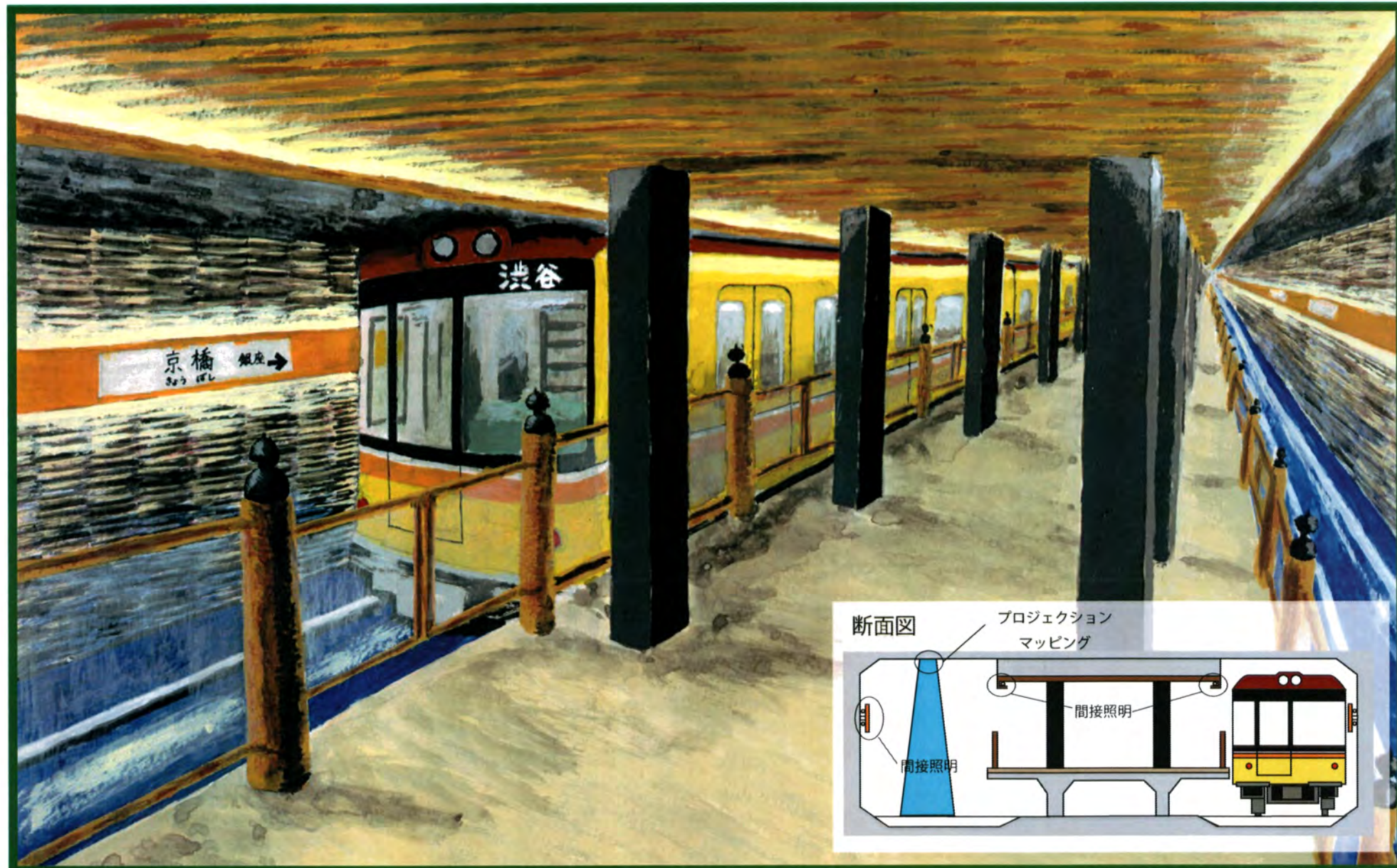


ゆるやかな時の流れ

現在、地下鉄は多くの人々にとって日常生活の一部となっています。せわしく流れる時間の中で、駅構内を歩いたり電車を待ったりする時間は無意味だと思われているのではないのでしょうか。しかし、東洋初の地下鉄として開業した当時、人々は夢と好奇心で胸を膨らませながら地下鉄を待っていたに違いありません。そこで、駅構内を落ち着いたデザインにすることにより“ゆるやかな時の流れ”を感じさせる空間をつくり、利用者にとって待つという行為がより楽しくなることを期待します。

G10 京橋駅 オフィスワーカーの癒し



プラットフォームは戦後埋め立てられてしまった京橋川をモチーフに、線路にはプロジェクションマッピングで水の流れを映し出し、音声で川のせせらぎを流します。銀座線にはパンタグラフがないため、水の映像を映す機械は線路の天井に設置することが可能です。天井や安全柵の枠は木製とし、昔から親しまれていた京橋を連想させます。



改札口周りはモダンな街並みに合わせ、自然な流れで11の地へ向かえるようにします。床は木製のタイル貼り、壁には観葉植物を配置することによって、落ち着いた印象にします。

—想定するユーザー像
京橋駅にあるオフィスに転動してきた女性。遠藤良美(32歳)。夫と二人暮らし。在宅地の最寄り駅は東西線荻窪駅。

初出勤日

会社の転動で今日から京橋のオフィスに勤めることになった。新しい職場では覚えることも多く、また前の職場との雰囲気の違いに慣れることに必死だった。ガラス張りのビルが立ちならぶ街並みの空に月が浮かぶ頃、良美は疲れた様子でオフィスから京橋駅までの道を歩いていた。駅に隣接する商業施設で買い物を済ませた後、そのまま地下の駅へ直結する道を進んだ。ふと気が付くと、もう改札に着いていた。改札周りの空間は普段の地下鉄のイメージと違い、近代的な街並みがあるように感じられた。ホームへの階段を降りると、どこからか水が流れる音が聞こえ、良美の前にはどこか懐かしさを感じさせる景観が広がる。木造の橋で見るような欄、石造りの壁、木の天井、青く照らされた線路。電車を待つ間、その景観の醸し出す雰囲気に入れられ、今日一日疲れた身が安らぐようであった。新しい職場でもがんばれそうな、良美はそう思った。

G11 日本橋駅 品格と美しさ



改札口周りの床や壁には花崗岩を用い、柱は青銅で覆うことにより、品格ある日本橋を連想させます。壁は銀座線カラーである橙色の照明で照らし、美術館のような幻想的な雰囲気仕上げます。

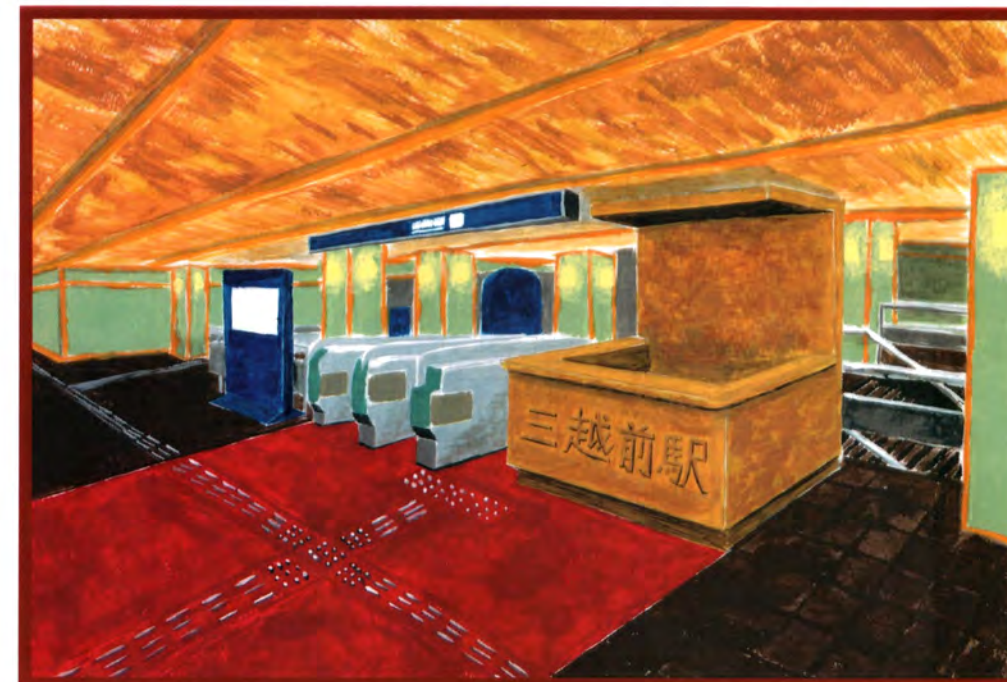


プラットフォームは床から天井まで安全柵で覆い、高層のエレベーターをモチーフにしたホームドアを設置します。壁には防音の素材を用い、クラシック音楽を流してホテルのロビーのような落ち着いた空間を作ります。

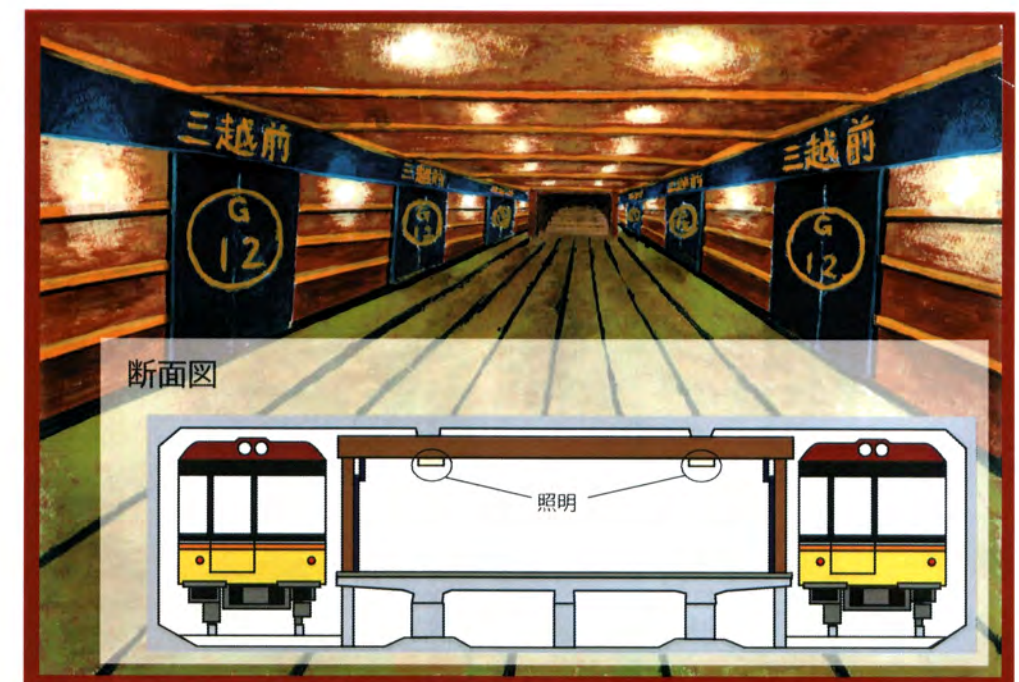
寄り道

初夏の風に肌も汗ばむ季節、良美はアイスコーヒーを飲んでた。蔵前で行われた取引先との打ち合わせが予定よりも早く終わったので、日本橋で喫茶店に入ったのだ。会計を済ませ、オフィスに戻るため、日本橋駅へ向かう。改札へ着くと石造りの壁、「日本橋駅」と書かれた青銅の柱が目に入った。思わず触ってみたくなるような美しさの柱に良美はそっと手を触れる。少し冷たくていい気持ちだ。ホームに降りるとクラシック音楽に包み込まれ、良美は優雅な気分になった。駅は毎日乗換で使っているが、平日の昼間は人が少なく、いつもとは違う雰囲気だ。エレベーターを模したホームドアの前で電車を待っていると、「これから自分はどんな世界へ連れて行かれるんだろう」と、わくわくしてきた。何気ない日常が特別な日に思えた一日であった。

G12 三越前駅 真心の招待



改札口周りは旅館の受付をイメージしたデザインにします。天井は木貼りとし、床には茶色のタイルを、改札口前には赤絨毯を敷きます。壁は土壁を採用し、伝統的な空間を強調するだけでなく、調湿・蓄熱・遮音・防音・防火などの効果も期待します。



プラットフォームの床は畳の廊下を模したタイル貼りとし、呉服屋の暖簾をモチーフにしたホームドアを設置します。壁には防音の素材を用い、三味線の音楽を流して伝統的な雰囲気を演出します。

休日の買い物

転動後の生活にも慣れて来たころ、休日を使って久しぶりの買い物をしに日本橋三越本店へ行くことにした。良美は夫と歩いて荻窪駅まで行き、電車で三越前駅まで行く。移動中の話題といえば仕事の愚痴ばかりだ。他にもっと良い話題があるだろう、そんなことを考えているうちに三越前駅に到着した。電車のドアが開くと、三味線の音色が降車する二人を出迎える。降りたホームは良美の好奇心をくすぐるもので満ち溢れていた。特徴的なホーム扉にはじまり、和の雰囲気を醸し出す壁、天井、床。初めて見る光景に二人の会話は弾んだ。「このホームドアは呉服屋の暖簾をイメージして作られたんだよ。」と得意気に話す夫を見て、良美は少し微笑ましく思った。ホームの階段を上ると、改札口はまるで客人をもてなす受付のように思えた。気が付くと会話の内容も明るくなり、二人は手を繋いで買い物に向かっていた。